

岩手中学校旧制十六回生「思い出の手記」

# 『忘れ得ぬ日々』 発刊にあたって

編集委員会代表 福士俊朗

私たち旧制十六回生は全くの戦中派です。

昭和十六年、中学一年の年に太平洋戦争が始まりました。

戦争中であっても、一年生二年生のうちはまだ中学生らしい穏やかな毎日があったのですが、三年生あたりから時代は次第に戦時色が濃くなってきました。勤労奉仕や野外教練が多くなり、同級生の中から予科練習生や特別幹部候補生で軍隊に行く人達も出てきたのです。

そして四年生の六月、私たちは学校を離れ、久慈の鉾山、川崎の軍需工場に動員され、翌年四月、動員先の川崎で敵の大空襲を受けて焼け出され、私たちの中学時代は終わったのです。

中学校修業年限は五年から四年に短縮され、卒業式は、動員先の川崎で同じく動員で来ている他校の生徒と一緒に「海ゆかば水漬く屍、」を歌ったのです。いろいろな都合で帰郷していた人達には、卒業式も何もなく、がらんとした校舎で

ただ卒業証書を手渡されただけだったといいます。

この文集の中で、同級生の皆さんは、ただ戦時中の体験、学徒動員のときの空腹感だけではなく、あの頃の授業のこと、先生たちのこと、友達やいろいろな生活の断片を懐かしく語ってくれています。

あれから半世紀、五十年経った今でも、私たちには、この時代のさまざまな体験は茫漠とした過去の記憶の中にありながら、さまざまな屈折や色合いを見せて一際鮮やかに心の中に焼きついているようです。同級生のある一人は、これを、「全体が墨絵の遠い山並みのように淡くかすんでいる。その中の全景となる松幹の樹膚のように」と表現しています。こうしてこれらの体験は、その後の私たちの精神の一部となり、深いところで人格の一部となっているに違いありません。

今回のこの文集発行の意味はここにありました。一人一人の精神の一部になっている記憶の断片を皆で出し合って、目に見える形で記録にとどめ、それをお互いの共通な精神的な財産にしようというわけです。これは、あるいは、皆といっしょに語る自己史の一部であるのかも知れません。昭和十年代の後半を、こんな形で生きていたのだという自分の確信の証になるのかも知れません。

やがて二十世紀が終るとき、テレビや新聞は「激動の二十世紀」などというような特別番組を組んで二十世紀を振り返るようなことがあるでしょう。

こんなとき、この小冊子は、私たち同級生にとっては、昭和ひと桁生まれの七十年の生涯のうちの、もっとも大事な青春の一部を語る一冊であってほしいものです。同級生の皆さんの今後のご自愛を祈ります。